



父さんは母さんをすごく愛していた。

「世界で一番大切な人。あっ、哲は二番な」
いつも言っていた。

もちろんぼくだつて母さんのこと大好きだつた。

そんなぼくが恥ずかしくなるくらい、父さんは母さんを
愛していた。

「何度も何度もアタックして結婚したんだぞ」

それが父さんの口癖だつた。

その母さんが突然、事故で死んだ。

父さんはショックが大きすぎて、葬式が終わっても、一
週間が過ぎてても、放心状態で会社に行かない。ろくにご飯
も食べない。ただ、家の中に引きこもっていた。
どんどん痩せて無精ひげだけが伸びた。

一か月目に、父さんは会社をくびになった。

会社のことを考えなくてよくなった父さんは、ますます
だらだらと家の中でくすぶって、立ち直れなかつた。

そんな父さんを横目で見ながら、ぼくは学校に行つた。

「今日も学校行くのか。哲、すごいなあ。強いなあ」

「うん。今日も元気に行つてきますす！」

ランドセルをカタカタ鳴らして見せる。父さんは、ぼく
が悲しがつてないとても思っているのだろうか。

悲しくてもお腹は減る。父さんはご飯を作つてくれない。

学校に行けば給食が食べられる。

給食はお腹を満たすだけじゃない。パンとか、カップ麺
とかコンビニの弁当とかばかりの中で、たったひとつの栄
養源だ。座っていれば母さんのおいしいご飯が出てくるの